

独 占 資 本

P. バラッサー
P. スウィーザー 著
小 原 敬 士 訳

独 占 資 本

—— アメリカの経済・社会秩序にかんする試論 ——

ポ ー ル ・ バ ラ ン 著
ポール・スウィーギー

小 原 敬 士 訳

岩 波 書 店

独占資本

昭和四十二年四月二十七日 第一刷発行 ©

定価 六百元

訳者 小原敬士

発行者 岩波雄二郎

発行所 株式会社 岩波書店
東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地

三陽社印刷・松岳社製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

日本語版への序文

『独占資本』の最初の翻訳の公刊が日本訳となるであろうということは、わたくしにとっては、ひとつの喜びのもとである。日本の読者はいままで、故バラン教授と、わたくし自身との両者の著作を、ひじょうに寛大にうけいれてくれた。わたくしは、日本の友人たちが、われわれのこの共同労作を、同じように歓迎する値打ちがあるとおもって下さることを希望する。わたくしが只ひとつ残念に思うことは、ポール・バランがここにいないくて、喜びをともにすることができず、またわれわれの尊敬する友人小原敬士教授にむかって、その際立って迅速で、またひじょうに有能と思われる翻訳の仕事にたいして、わたくしといっしょに、謝意を表することができないということである。

個人的な考えとはまったく別に、この『独占資本』の日本語版にたいして満足の意を表するもうひとつの理由がある。日本には数多くのマルクス主義的社会科学者がいる。それは、残念ながら、世界全体の英語国民のばあいよりもずっと多い。そして、それらのひとびとは、本書をもっとも建設的に批判することができ、また、あるいは実り多いものとおもわれるかもしれない理論的思考や経験的調査のあらゆる面を、さらにいっそう発展させることができるひとびとであるに違いない。そればかりでなく、日本の独占資本主義の構造は、二、三の重要な点で、アメリカの構造とひじょうによく似ている。だから日本のマルクス主義者たちは、本書の仮定や結論の多くのものを、かれら自身の観察や経験を基礎として評価することができに違いない。われわれが本書をかくに当っての主要な目的のひとつは、マルクス主義者に挑戦し、かれらに、その思想を再検討し、そして必要なばあ

いには、新しい方向にむかって厳然と歩み出すような刺激を与えることであった。わたくしは信ずる。日本は十分に、そのような挑戦にもっともよく、創造的に答えることができる国となりうるであらう。

一九六六年七月二二日、ニューヨークにて

ポール・M・スウィージー

序

一九六二年の初頭、その頃、兄の政府の検事総長をやっていたロバート・F・ケネディー Robert F. Kennedy は、アメリカの一種の親善大使として世界を一周する旅行をおこなった。帰国後かれはアソシエイテッド・プレスのの年次午餐会で演説を試みた。四月二四日の『ニューヨーク・タイムズ』の記事によると、かれはその演説の中で次のような出来事を語った。

「わたくしはインドネシアで、もうひとつの大きな学生団体に紹介されました。わたくしの演説が終ると、ひとりの青年が立ち上って質問をしました。この質問の途中でその青年はアメリカのことを独占資本主義の体制としていいあらわしました。そして、かれがそのような言い方をしたときに、学生団体の半分のものが拍手をしました。

そこでわたくしは言いました。『よろしい。わたくしはお尋ねしたいとおもいます。わたくしはアメリカの代表者としてここにきています。あなたが独占資本主義という言葉によって意味しているのは、いったいどのようなことでしょうか。アメリカでそのような言い方の定義となっているものは、いったいなんでしょうか。あなたは、ひとを傷けるような意味でそれをいいました。アメリカでその言い方にぴったりするものは、いったいなんでしょうか。あなたは、独占資本主義によって、なにを意味するのですか。』

かれは、なんの答もませんでした。そこでわたくしはいいました。『よろしい。誰でもいいですから、この方がその言葉をつかったときに拍手をなさったひと、喝采をしたひと——あなたが独占資本主義によ

て理解しているのは、いったいなんでしょうか。』それでも、誰ひとりすすみ出ようとはしません。」

もしもケネディーが、かれの聴衆が独占資本主義の問題を論議するのを拒否したことは、知識の欠如を示すものであるとおもったとしたら、かれはたしかに大きな間違いを犯していたのである。インドネシアの学生は全世界の低開発国の仲間と同じように、独占資本主義について、多くのことを知っている。かれらは、そのもっとも醜い顔をみているし、その世界的な政策の結果を、かれら自身の生活の中にうけていたからである。しかし、もしもかれらが、それは、あっりと定義を下したり、気の利いた論争の論点とするには、あまりにも深刻な問題であると考えたとしても、少しも驚くに当らない。

しかしながら、ケネディーの疑問はいまでも生き残っている。そして、われわれは、かれが、それらの疑問は、かれの同胞の多くのものが同じようにいだいている本当の無知の反映であるとおもっていたという点で、かれに敬意を表することができる。本書は、その回答に本当に関心をいだき、そして、ひとつのきわめて複雑で困難な問題のある程度の理解をうるために、必要な時間と労力を払おうとしているすべてのひとにむけられている。われわれはまた、本書がインドネシアその他のあらゆる低開発国の学生が、すでにその重要性をよく認識している現実について、いっそう十分かつ明確な理解に達するのに役立つことをも願っている。

われわれは、ひとつの型の批判にたいして、予め答えておきたい。われわれはおそらく、大袈裟なことをいっているという非難をうけるにちがいない。それは、われわれがいつでも服罪しようとおもっている非難である。きわめて真実な意味で、科学と芸術の機能は両方とも誇張することである。ただし、誇張されるものが真理であって、虚偽ではないことが必要である。誰でも、われわれが、このような条件の埒外に踏み出しているということを主張しようとするものは、今日のアメリカ社会の真実についての自分自身の見解を提示する覚悟をもつべき

である。われわれはそのような努力を歓迎する。それ以外のものにとっては、真理の最後の試金石は、誰かの主観的判断ではなくて、歴史の客観的な進路である。

この書物は、ひじょうに長い懷妊期間——最初の試験的な概観から出版の日までのほとんど正確に一〇年間——があった。例証や説明の目的のために事実の資料が蒐集せられ、必要に応じてつかわれたが、しかし、資料を新しくしようとする組織的な試みはやらなかったし、また、われわれの問題のあれやこれやの面に関係があるすべての重要な著作を、それが発表されるにしがって斟酌することもしやらなかった。本書は副題が示しているように、ひとつの試論であって、学術論文ではない。だから本書は、包括的であることを誇るつもりはない。

われわれの学問上の負目の大部分は、本文や脚注によって明らかであろうから、ここでとくに言う必要はない。周到な編集や、説明と文体の点での無数の改善については、われわれは、いままでに、いろいろな機会に、われわれ兩人ともそうであったように、ジョン・ラクリフに負うところが多い。

以上は、われわれが序文にいれるつもりで二年前に書きとめておいた覚書から書き直したものである。わたくしにとっては、ふかい悲しみであるが、いまや追記をつけ加え、そして自分ひとりで序文の署名をかくことが、わたくしの運命となった*。

balan はタイプストや印刷所にわたした最終原稿をとうとうみななかったけれども、わたくしは強くいわねばならない。そのことは、この書物の共著としての性格をいささかも減らすものではないと。われわれは、最初の概観が紙にかかれたずっと前から、絶えざる意見の交換によって、アイデアや構想をつくり出した。われわれの

ひとりが書いたものはすべて、他のものによって詳細に批判せられ、そして多くのばあい、一度ならず再執筆され、再批判された。いま本書に盛られているあらゆるものは、バルンの生前にこのような手続きをへたものであった。全体の原稿を最終の形にしたことを除き、わたくしがやった唯一のことは、二つの追加的な章となったはずのものを割愛したことである。この材料は、バルンの死亡当時、荒削りの原稿になっていたが、しかし、いつでも、われわれのどちらかが重大な疑問を提出しており、それはいまでも論議と解決を要する状態にとどまっている。どの章も論文全体の主題にとって不可欠のものではなかったから、いちばんよい解決方法は、それらのものをすべて削除することであるようにおもわれた。これらの章がなくても、本書は、わたくしが予期した以上に、もしくはわれわれが最初に意図した以上に長くなることが判ったために、わたくしはますます楽な気持ちで、この結論に達したのである。

一九六六年一月一日、ニューヨーク市にて

ポール・M・スウィージー

* バランの死後一年たってから、『マンズリー・レヴュー』誌は、レオ・ヒューバーマンとわたくし自身との編集によって *Paul A. Baran: A Collective Portraits*. (March 1965) と題する特集号を出した。それは、その後単行本の形で出版された。この書物は、バルンの著作からの三つの抜萃、かれの著作と生涯にかんする二つの論文、世界全体からのひとつとによる三八の追悼文およびかれの著作の文献目録をふくんでいる。

目次

日本語版への序文

序

第一章 緒論……………三

第二章 巨大株式会社……………一九

第三章 余剰の増加傾向……………六

第四章 余剰の吸収——資本家の消費と投資……………二〇

第五章 余剰の吸収——販売努力……………一五

第六章 余剰の吸収——市民政府……………一七

第七章 余剰の吸収——軍国主義と帝国主義……………二六

第八章 独占資本主義の歴史について……………二五

第九章 独占資本主義と人種関係……………三〇

第一〇章 独占資本主義社会の特質について……………三四

第一章 非合理的な体制 四〇七

付録 経済的余剰の推計 ジョセフ・D・フィリップス 四四七

訳者あとがき 四七五

著者名索引

事項索引

統計表の一覧表

一 非金融会社にたいする若干の金融データ	一九五三—一九六二年	一二五
二 投資の流出額と所得	一九五〇—一九六三年	一二九
三 政府支出	一九〇三—一九五九年	一七九
四 国民所得における会社利潤の分前		一八一
五 政府支出	一九二九—一九五七年	一八五
五 a 政府支出	一九二九—一九三九年	一九三
六 スタンダード・オイルの子会社		二二六
七 製造工業の国外および国内販売額の増加と商品輸出額	一九五七—一九六二年	二三八

八	鐵道資本の成長 年平均……………	二七四
九	景気循環の型 一八九〇—一九一四年……………	二七五
一〇	失業率 一九〇〇—一九六三年……………	二七九
一一	生産能力の利用度 一九二〇—一九二九年……………	二八七
一二	生産能力の利用度 一九三〇—一九三九年……………	二九三
一三	利潤と国民所得 一九二九—一九三八年……………	二九四
一四	生産能力の利用度と失業 一九五〇—一九六三年……………	二九七
一五	旧南部連合—一州からの黒人の移住者数 一八七〇—一九六〇年……………	三二〇
一六	白人と白人以外の失業率 一九四〇—一九六二年……………	三二三
一七	白人以外のものの政府雇用 一九四〇—一九六二年……………	三二六
一八	経済的余剰における利潤所得の要素……………	四六六
一九	会社以外の企業の利潤所得の推計……………	四六七
二〇	その他の形態の財産所得……………	四六八
二一	政府による余剰の吸収……………	四六九
二二	経済的余剰総額と、その主要構成分……………	四七〇

図表の一覧表

一 仮説的利潤曲線……………	一〇七
二 ユー・エス・スタイル会社・操業率と株主投資の収益率との関係 一九二〇—一九四〇年、一九四七—一九五〇年、および一九五三—一九六〇年……	一〇九
三 失業率 一九〇〇—一九六三年……………	二八〇
四 乗用車・工場売渡台数と登録台数 一九一一—一九六二年……………	二八五
五 国民総生産の百分率としての余剰……………	四六七

「真理は全体である。」——ヘーゲル

「二世紀以前に、かつてヨーロッパの植民地であったものが、ヨーロッパに追いつく決意をした。それはうまくいった。そして、アメリカ合衆国は怪物のようなものとなり、そこではヨーロッパの汚辱、病患、残忍さがおどろくべき大きさに成長した。」——フランツ・ファノン

第一章 緒 論

1

今日、アメリカにおける社会科学の状態は矛盾にみちている。研究者や教師の数はどしどしふえている。正確な計数的推理や、面倒な統計的方法を駆使する能力をふくめて、これらの訓練や専門技能は、わずか一世代前の先輩たちが達成した水準をもはるかに抜いている。大学、財団および政府は、いままでにないくらい大きな規模で、研究計画を組織し、補助金を出している。書物、報告書、論文などが涯しのない流れとなって出されている。しかも、このあらゆる強力な知的活動は、われわれの社会の機能や動向にたいするごくわずかの新しい洞察しか与えていない。

たしかに、われわれは、わが国の社会がけっしてうまくいっているところではないことを知っている。しかし、C・ライト・ミルズ C. Wright Mills がわずか四、五年前に、いみじくも「アメリカの大祝賀会」と呼んだところには、社会学者たちは、すべてのことが素晴らしいということを、われわれに保証していた。事実はその反対であるということ——つまり、遊んでいる人間や遊んでいる機械が、国内の生活苦や海外の飢餓と同時に存在している。貧困が豊かさと同調をともして増大している。莫大な資源がつまらないやり方や、ときには有害なやり方で浪費されている。アメリカは世界中の反動の象徴となり、擁護者となった。われわれは二度も三度も戦争

をやり、そして、明らかにますます多くの戦争、ますます大きな戦争を目指している、といったようなこと——これらのすべてのことや、それ以上のことについての知識は、社会学者からわれわれに与えられたのではなく、避けがたい事実の観察によって与えられたものである。むしろ、われわれはつぎのようにさえることができる。社会学者たちは、すべてのことは、かれらがあらゆる可能な世界の中で最善と考えるものの中の最善のものにむかってすすんでいるということ、永いあいだわれわれに保証することによって、できるかぎり、われわれが真実をともにみないようにさせたのである。

われわれは、社会学者がより多くのよき訓練をうけねばうけるほど、ますますはっきりと、社会の現実を説明することができなくなるというこの矛盾を、どのように解釈することができるであろうか。

その答えの一部は、もちろん単純な日和見主義の中にある。笛吹きに金を払うひとが、曲を所望するのである。そして、誰が金を払い、そのひとがどんな曲を選ぶかは、誰でもが知っている。資本主義の社会では、有効需要がつねにそれ自身の供給を生み出すであろう。

しかし、問題をそれだけにしてしまつては、間違ひでもあるし、名譽毀損にもなる。アメリカの社会学者の中には、真理をもとめる本当の情熱によって動かされているきわめて誠実なひとたちもいる。もしも、そのようなひとたちもまた、われわれの時代の大きな社会問題に光りを投ずることができなかったとするならば、その理由は日和見主義ではなくて、かれらの見方や方法論の内在的な限界である。これらの限界は、一部はかれらが過去からうけついだものだし、一部は自分たちの環境に應じて、かれらがつくり出したものである。この環境というのは、なによりも、ますます複雑となる環境であり、それがあらゆる種類の、またあらゆる水準におけるますます高度の専門化を要求する。このような道を歩む社会科学はますますその部屋に押しこめられてしまい、その熟